



# 飯田市歴研ニュース

News Letter

**No. 89**The Iida City Institute  
of Historical Research

2017年8月1日 発行

飯田市歴史研究所

〒395-0002  
長野県飯田市上郷飯沼3145  
TEL 0265-53-4670  
FAX 0265-21-1173  
E-mail [iehr@city.iida.nagano.jp](mailto:iehr@city.iida.nagano.jp)

## 歴史研究所の臨時休所と新施設での利用再開について(お知らせ)

飯田市歴史研究所は今年9月に旧鼎東保育園施設へ暫定的に移転をするため、現在、移転に向けた作業を進めています。作業の進展に伴い収蔵史料及び書籍の閲覧利用の休止をお願いしていますが、書架等の移設が始まること、また移設後の収納整理作業の関係から、8月10(木)から9月19日(火)までの期間を、臨時休所日とさせていただきます。

利用制限の内容と期間の詳細は、広報いいだ(7月1日号)や飯田市ウェブサイトの歴史研究所のページ[<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/39/20170601.html>]でご案内しています。

歴史研究所の利用を希望される方は、事前にお問い合わせくださいますようお願いします。ご不便をおかけしますが、ご理解ご協力をお願いいたします。

移転先の新施設での利用(資料・書籍の閲覧利用及びレファレンス)再開は、平成29年9月20日(水)になります。

移転後のフロア配置、交通のご案内は以下をご覧いただきたいと思いますが、車でお越しの場合は、ご注意ください。よろしくお願いします。

### 交通のご案内



### フロアのご案内



### 受付

ご用の方はまず受付にお尋ねください。

所蔵図書などをご覧いただけます。

**【移転先住所】** 〒395-0803 長野県飯田市鼎下山538 (旧鼎東保育園)  
(TEL. 0265-53-4670 FAX. 0265-21-1173 ※電話・FAX番号は変わりません)

### 【アクセス】

中央高速道路 飯田ICから車で13分  
JR飯田線 下山村駅から徒歩6分

\*道が狭いので、車でお越しの際はご注意ください。



# 清内路調査という「学校」から

吉田 伸之 (歴史研究所所長・東京大学名誉教授)

歴史研究所が取り組む共同研究「課題研究」で、この間清内路の調査と研究をテーマ（「山里の分節的把握—阿智村清内路を素材として」）に取り組んでいます。この調査研究活動は、私がこれまででもっとも長く深く関わっているものです。歴史研究所創立のころ、前澤健さん（当時清内路小学校）のご紹介で、在職していた大学の実習授業（「史料調査実習」）として、2003年秋に初めて調査に入りました。今も毎回20人前後の参加を得て、この6月の調査で20回となりました。史料群の数はすでに20を超え、作成した目録点数は厖大な数に達しています。いわゆる旧家の文書だけ調査したり、調べたいテーマと関わるものだけ抜き取って調べたり、というのが今も横行する中で、じっくり腰を据え時間をかけて調査することの意味を噛みしめています。清内路の調査では、毎回のように地域の奥様方が地元の野菜をふんだんに使った美味しい郷土料理を作ってくださり、楽しい懇親会を開いていただいている。こうした密な繋がりの下で、清内路で学んでいることは数知れません。ここから育った若い研究者もすでに何人か生まれています。しかし学びの中身は歴史研究にとどまりません。山里のくらし、人と自然、地域のありよう、地域の文化基盤など、学ぶ対象は豊富です。この調査は文化を学び創造するひとつの「学校」のような気がします。すでに「足弱老人」の境地ですが、当分の間この「学校の生徒」で居続けるつもりです。



秋の下清内路 (2015年11月)



公民館での交流会 (2017年6月)

## 近現代史ゼミ紹介 聞き書き「飯田・上飯田の暮らし」

近現代史ゼミでは「飯田・上飯田の暮らし」をテーマに、地域に生きる人々からの聞き書きという手法による「地域社会史」研究を継続してきました。その成果を『飯田・上飯田の暮らし』として第6集まで刊行することができました。この共同研究の契機となったのは古島敏雄『子供たちの大正時代』のゼミでの読み合わせからでした。最初は飯田町の大正時代から昭和初期に生まれた人たちの戦前の時代が中心でした。現在は上飯田も含めて、戦後史をもテーマにして聞き取りを進めています。第1集の発刊が2005年ですから、13年間の継続研究になります。

こうした聞き書き研究の意味ですが、飯田は戦後の大戦で多くの文書資料を喪失してしまっただけに、伝統都市としての飯田町の記憶の継承は地域史の重要な課題です。聞き取りの過程で提供された火災を逃れた1枚の写真が歴史を語る材料となっていくことも稀ではありません。さらに、多様な庶民の活動、とりわけ衣食住をはじめとした日常生活の歴史、また生活空間としての都市景観はなかなか文書資料には残らないものです。私はこのような歴史実践は日常生活の深層へと沈潜していく「社会史」として新たな歴史学の模索につながっていくものともなると考えます。

私たちは地域に生きる人々の人生と向き合い、記憶を継承することによって、「1人ひとりにとって歴史とは何であったのか」という問いを、私たちも現在の歴史を生きる個人であるという思いと重ねあわせて、語りあっていきたいものです。

(調査研究員 田中 雅孝)



第6集「飯田・上飯田の暮らし」  
稻垣昭吾氏の切石草木染工房(2014年撮影)



# 院政期の信濃国衙領「宮田村」は「請布所」

田島 公 (歴史研究所顧問研究員・東京大学教授)

平知信の日記『知信記』の古写本(陽明文庫所蔵)の内、天承2年(1132)夏卷には保延2年(1136)4月17日付「信濃国宮田村司平家基解」(宮田村司が信濃国衙に上申した文書)が紙背文書に見える。書出しに「口濃國宮田村司散位平朝臣家基解 申請 国裁(信濃)事」とあるので、『平安遺文』5巻(2343号)は「口濃國」を美濃としたが、1981年に戸田芳実氏は信濃と正しく解釈した上で、宮田村が信濃国の公領(国衙領)の内で国司により万雑事(万雑公事とも。令制の人身課税の庸・調系統のものが平安中期以来、統合され、国衙が公領・荘園の土地に賦課した雜役〔夫役〕・雜物〔現物納〕)を免除された単独所領として分化する代わり、村民は毎年、公田(国衙領の土地)1町当たり細布(細美布とも。上質の麻布)20段、在家(課税単位である村民の家屋や付属の田畠と農民)1宇当たり中布(上布に次ぐ麻布)1段、の割合で麻布を国衙に納めた別符の地、即ち国衙が高級麻布を收取する為に「御布所」として伊那郡内に特別指定した村である、とされた。宮田村は保延元年には細布360段・中布26段を国衙に完納していたが、翌2年春、信濃守藤原親隆が在京中で国府に不在の間、留守所の官人が先例を破り、神事や勅事の造営等による役夫工米のような一国平均役や、村内を通る東山道で東山道諸国から京に貢納される御馬と砂金の通送(駅家ごとに荷物を順繰りに送ること)や供給(食事の提供)などの臨時雜役が、新たに課せられそうになつたため、村司が信濃守に訴えたのであり、信濃守親隆の岳父で摂関家(藤原忠実)家司でもあった平知信の許に渡った文書が、子の信範が『知信記』を書写する料紙に用いられた。この「宮田村=御布所」説は尾張国(猿投山西南麓)に展開した窯業生産に対する尾張国衙の管理機構)の存在に引かれての解釈で、更に鎌倉期以降の史料に見える春近領という特殊な大所領が朝廷の御服を調達する御料所「禁裏御服領所」として成立することと関連させているが、原本調査の結果、「御布所」は「請布所」の誤読で、宮田村を御布所・御器所との関係では理解出来なくなった。請布所は請所に名称が近く、国衙に対して麻布の徵収を請け負つたことに由来するということが第一義で、御布・御器のように天皇や朝廷が用いる物品調達との関係で理解する説は再考が必要となつた。

## 伊那谷・満洲・福島から追われた人びと

4月6・7日福島県双葉郡葛尾村の岩間政金さん91歳を訪問、聞き取り調査を行つた。同行したのは、満洲帰国者の戦後開拓を追つてゐる森武磨さん、向山敦子さん、記者の竹越萌子さん、篠崎貴志さんであった。岩間さんは上久堅村(現飯田市)から家族5人で1938年満洲吉林省郊外の白山子松島開拓団へ自由移民として入植した。祖父は上久堅村を明治23年から34年まで村長として統治し表彰されている。父は松島親造の開拓精神と共に鳴、志と共に渡満したのであろう。青年だった政金さんは満洲はいいところだったという。敗戦で帰国しても住むところもなく、福島県へ再び開拓に挑んだ。下伊那から入ったのは2カ所で、岩間さんは松島自由移民で満洲に行つてゐた伊賀良・松尾・下久堅・上久堅村からの7軒で葛尾村手倉へ入り、松島共栄開拓組合として出発した。ここは車一台がやっと通れるくらいの山深いところで、郵便屋さんもカーナビも届かないところだ。しかし6年前、15km離れた福島第一原発の爆発で放射能は全村へ押し寄せた。私たちが葛尾村へ入るとすぐ目に入ったのが黒いビニールの袋に詰まつた放射性物質の山積みであった。以前は田んぼだったところの道路端各所に置かれ、点在する家々はカーテンが閉められ、学校も、幼稚園も真っ暗である。岩間さんの家の民家のあるところからさらに奥で、避難解除がでて5年ぶりに帰宅したのは1軒きりだ。70年かけてきり開いた田んぼ、畑、肉牛はすべて失つた。家の周りの山・畑・田は表面土を削り取られ白っぽい土が痛々しかつた。畜舎のあった地所はまだ放射線量が高いのか使用許可が出ないでいる。ゴーンという爆発音を聞いてから5年間の仮設住宅暮らしこそ岩間さんの体力を弱めたが帰宅できてどうにか元に戻りつつある。

最後に岩間さんは私たちに、戦争は終われば片づければ終わるが、放射能は目に見えなくだめだ。「原発は絶対だめだ」と語気を強めた。



黒いビニール袋に詰まつた放射性物質の山積み

(調査研究員 齊藤俊江)

# 飯田アカデミア2017 第31講座

## イタリア・トスカーナ：丘陵都市シエナの歴史と景観

9月24日(日)

- 第1講 10:00~11:30  
シエナの都市形成とカンポ広場  
第2講 13:00~14:30  
未完のシエナ大聖堂拡張事業



のぐちまさお

講師 野口昌夫さん (東京藝術大学美術学部建築科教授)

1954年東京都生まれ。1977年東京工業大学工学部建築学科卒業。1978年ロンドンのAAスクール大学院留学。1980年東京工業大学大学院修士課程修了。1981年よりL.ベンヴェヌーティ設計事務所(フィレンツェ)に勤務しつつ、フィレンツェ大学にイタリア政府給費留学(～85年)。1986年東京工業大学大学院博士課程修了。工学博士。

会場 飯田市役所C棟3階会議室(飯田市大久保町2534)

受講料 500円(資料代)

### 講師からのメッセージ

イタリア、トスカーナ州にある丘陵都市シエナは1287年から1355年にかけて一般市民9名を委員とするノーヴェ体制による民主的な政治が行われ、経済、文化、芸術の絶頂期を迎えた。都市内は華やかなゴシック様式の建築で覆われると共に、都市構造もこの時期に確立し、現在に至っています。

本講座では世界一美しいと謳われるカンポ広場、そして未完に終わった大聖堂拡張計画を中心に、その絶頂期の建築、広場、景観をスライド画像で解説します。

※1講義のみでもご参加いただけます。受講をご希望の方は歴史研究までお申し込みください。当日参加も可能です。

## 歴研ゼミ&ワークショップ 8月・9月の予定

### 近世史ゼミ 担当:千葉拓真(研究員)

8月1日 上郷公民館201会議室・17日 上郷公民館203会議室  
9月5日・19日 鼎公民館4階図書室  
(第1・第3火曜日) 19:00~20:40

### 近現代史ゼミ 担当:田中雅孝(調査研究員)

※8月・9月は休講いたします。

### 満洲移民研究ゼミ 担当:本島和人(調査研究員)

※8月・9月は休講いたします。

### 地域史(川路)ゼミ 担当:羽田真也(研究員)

8月9日・23日 / 9月13日・27日(第2・第4水曜日) 18:30~20:40  
※地域史(川路)ゼミは、毎回川路公民館2階視聴覚室で行います。

### 思想史ワークショップ 市民の皆さんによる自主的学び合う場

8月2日・16日 上郷公民館201会議室  
9月6日・20日 鼎公民館4階図書室  
(第1・第3水曜日) 19:00~20:40

### 自分史ワークショップ 市民の皆さんによる自主的学び合う場

8月26日(第4土曜日) 飯田市役所C棟212会議室 14:00~15:30  
9月30日(第5土曜日) 歴史研究所 研修室 14:00~15:30

### 建築史ゼミ ※現在休止中です。10月から再開予定です。

開所時間:午前9時~午後5時

(※8月10日(木曜日)~9月19日(火曜日)まで移転のため臨時休所)

休所日:日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日

## 宮下功「満洲紀行」 昭和18年夏 教学奉仕隊の記録



満洲移民研究ゼミナル 編集  
飯田市歴史研究所 発行

A5判 502頁 並製  
本体価格 2,000円

好評発売中

- 昭和18年夏、教学奉仕隊の一員として満洲を訪れた久下堅国民学校長による41日間の全記録。
- 青年義勇隊、開拓団、現地の学校の様子をつぶさに記した異色の紀行記録。
- 学校職員と家族宛のはがき100通余、収集した多数の資料、豊富な図版を収録。
- 市民参加のゼミによる6年かぎりの翻刻完成。詳細な註と解説付き。
- 敗戦間際の満洲現地の訓練所・開拓地、都市の様子を伝える興味深い一冊。



イラハで採取した押し花



黒河街惠永国民学校3年児童のクレヨン画  
(日独伊三国が英國を攻撃している)